

# 視察報告書

委員会名	建設産業常任委員会					
視察日時	平成 27 年 10 月 28 日 (水) 15 時 30 分 ~ 17 時 00 分					
視察先	市町村名	能代市	人口	56,592 人	面積	426.95 k m <sup>2</sup>
視察項目	農業支援制度に関する調査					
視察参加議員	田原耕一、寺崎強、伊藤千代子、中村進、那須英仁、波多江貴士、藤井芳広					
視察随員職員	友岡卓也					

## 視察概要

能代市は、秋田県北西部に位置し、面積約 426.95 平方キロメートル、人口 5 万 6592 人 (平成 27 年度) で、山林が 26.4%、農用地が 20.4%、「21 世紀に残したい日本の自然 100 選」など、6 つの 100 選に選ばれるほどの自然豊かなまちである。

農業が盛んで、経営耕地総面積は、平成 22 年度で 6,126 ヘクタール、そのうち水田が 5,605 ヘクタール、畑が 503 ヘクタール、樹園地が 17 ヘクタールとなっている。秋田県を代表するブランド米あきたこまちの生産地の一つとして、コメ中心の農業が行われていたが、今年度から畑作の拡大を目指す取り組みを市独自に行い、機械等の導入や作付面積の拡大、自力の強化などを支援している。全国でも有名なコメどころの秋田県でも、コメの需要の低迷と米価の下落、40%を超える減反政策の中で、畑作への転換が進められていた。

支援制度の対象作物はネギ、みょうが、山ウド、アスパラガス、キャベツの 5 種類である。私たちはまず、市の農業振興課の案内で、県の補助で建設された J A 秋田白神メガ団地のネギの生産現場を視察した。そこは、県 2 分の 1、市と J A が 4 分の 1 ずつ負担し、13 ヘクタールの大地に白神ネギを作っており、年間 10 億円の売り上げを目指している。私たちが訪れた日は、ちょうどネギの出荷の準備に追われているところで、作業は可能な限り機械化されていた。3 回の土寄せをすることで、白い部分が長く品の良い白神ネギができ、ブランド化に成功したので、ネギの成功を機にウド、アスパラガスもブランド化を図っていくとのことであった。

政策の詳細については、政策①農業夢プラン応援事業で、認定農業者や集落営農組織等を対象に、機械や施設の経費に対し、県の補助事業にプラスして市が助成している。(例えば、県が 3 分の 1、市が 6 分の 1)。政策②は、がんばる農業者総合支援対策事業。農業後継者や新規就農者、将来認定農業者を目指す農業者を対象に、市独自に助成している。政策③は、園芸作物チャレンジ支援事業として、新たに野菜や花き、果樹などの園芸作物の栽培に取り組む農業者を支援する制度である。政策④は、健康野菜づくり支援事業として、ニンニクや生姜、菊芋等の健康野菜の栽培を支援する制度です。寒冷なため、除雪と暖房に費用がかかり、園芸が盛んでない中で、工夫して農業活性化に取り組んでいることがわかった。

また、作物を生産するだけでなく、果樹の新改種や加工販売を行う農業者を支援する

政策⑤果樹生産強化支援事業にも取り組んでいる。政策⑥は、農地の集積を行っている管理機構に、地域集積協力金や経営転換協力金を交付する制度である。最後の政策⑦は、六次産業化推進事業費補助金で、地元の農林水産物を活用し、六次産業化することで農業者の所得向上を目指す取り組みである。農家レストランなどの新規開業や事業拡大に要する経費を上限 600 万円まで補助したり、六次産業化に必要な資格取得や技術の習得に補助したりするものである。今年度からの事業であり、今後の展開が注目される。

意見（本市にとって活用すべき事項・課題など）

糸島市も農業を基幹産業と位置付け、第一次産業の振興に力を注いでおり、能代市と共通したところがある。本市の場合は、大消費地の福岡市に近いことや温暖なため、もともと畑作が盛んだが、能代市の場合、ブランド米秋田こまちなどの稲作にウエイトを置いてきたため、コメの需要が低迷し、米価が下がって転作率が 44%を超えている中で、水田から畑作への転換が懸命に行われている実情が印象に残った。

今後、TPPなどの政策転換が進めば、農業を取り巻く情勢はさらに厳しく、変化していくことが予想される。家族経営を中心とした本市の農業が、時代や市民に受け入れられるだけでなく、食料自給率の向上や、自然・環境保全の役割を果たしていることをも常に評価し、その振興に努めたいものとする。